

報道関係者各位

## 百日せきの流行が続く今、予防のためにできること 最も重要なのは妊娠中の三種混合ワクチン接種

2025年6月4日

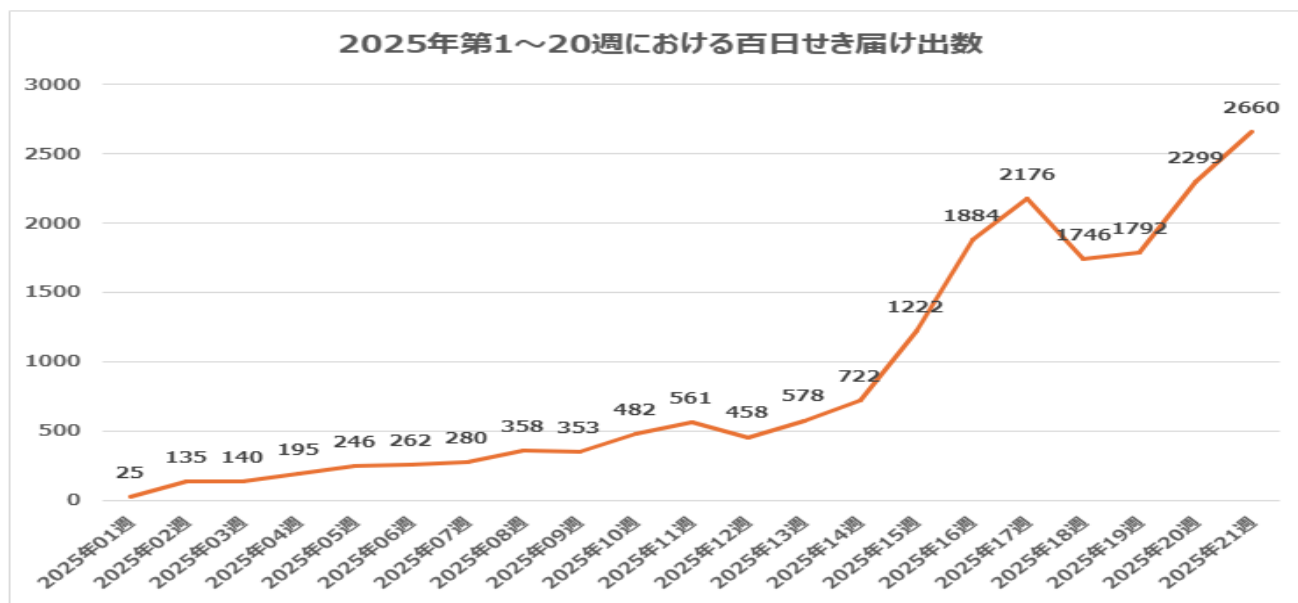
NPO 法人 VPD を知って、子どもを守ろうの会

NPO 法人 VPD を知って、子どもを守ろうの会（理事長 菅谷明則：すがやこどもクリニック院長）は、全国の小児科医等からなる会員とともに、VPD（Vaccine Preventable Disease：ワクチンで防げる病気）やワクチンによる予防の重要性を広く社会に訴えるとともに、すべてのワクチンの定期接種化を推進する活動をしています。

### 百日せきの流行が止まらない

百日せきは、百日せき菌による感染力のたいへん強い VPD です。新生児から高齢者までが感染します。とくに、ワクチン接種前の新生児、乳児が感染すると重症となり、集中治療が必要となり、死亡することがあります。近年、耐性菌の出現が世界的に問題視されています。

新型コロナウイルスに対する感染対策が緩和され、世界各国で 2023 年以降、百日せきの流行が報告されています。日本では、2024 年から報告数が増加し、2025 年は第 19 週（5 月 11 日時点）で過去最多だった 2019 年の年間報告数を超え、21 週（5 月 25 日時点）も増加傾向がみられます。



IDWR 速報値（<https://id-info.jihs.go.jp/surveillance/idwr/rapid/2025/index.html>）より作図

### 最も重要なのはワクチン未接種の赤ちゃんの予防

百日せきは、ワクチンで予防できる VPD です。生後 2 か月になったら、できるだけ早く五種混合ワクチンを受けてください。重要なのは、ワクチン接種前の新生児、乳児の重症百日せきの予防です。日本では妊婦の百日せきに対する抗体価は低く、母親からの移行抗体は出生児の百日せきを予防するには不十分なため、乳幼児では、百日せきに感染し重症化することがあります。乳児は典型的なせき発作を認めず、痙攣（けいれん）、無呼吸、脳症、肺高血圧などを合併し死亡することもあります。ワクチン接種前の低月齢の乳児の重症百日せきの予防には、妊娠中のワクチン接種が必要です。

### 「妊娠中のワクチン接種」で赤ちゃんの百日せきを予防

生まれて間もない赤ちゃんを百日せきから守るには、妊娠中の女性が三種混合ワクチン接種を受け、胎盤を通じて赤ちゃんに百日せきに対する抗体が移行することが必要です。妊娠中のワクチン接種は、出生直後から百日せきを予防することができます。現在、三種混合ワクチンは出荷制限されていますが、妊婦さんが最優先で三種混合ワクチンの接種を受けられる対策が重要と考えます。

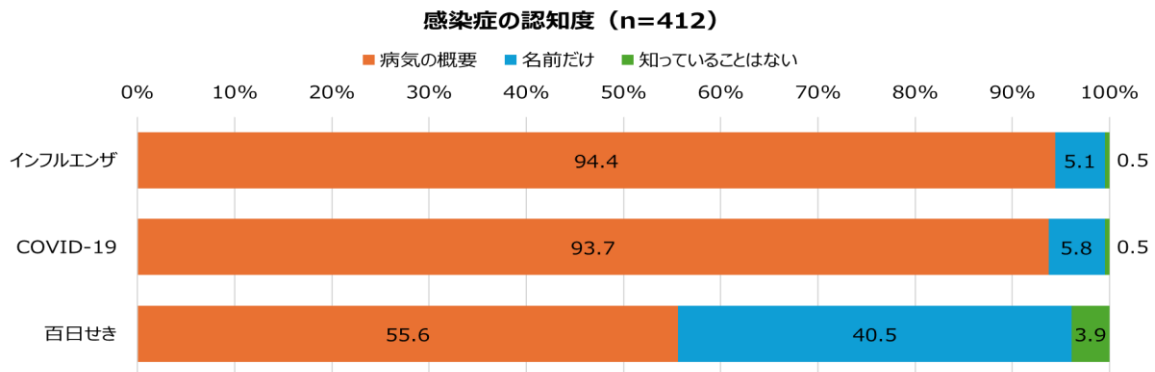
## 「妊娠中のワクチン接種による百日せき予防」の課題—調査結果から

米国では妊婦さんへのワクチン接種が定期接種で実施されています。一方で、日本では任意接種のためにワクチンの供給量だけでなく、情報も十分ではありません。当会では、百日せきを含む妊娠中の予防接種の啓発を進めるにあたり、2025 年 4 月、妊娠中の予防接種について調査を実施しました。

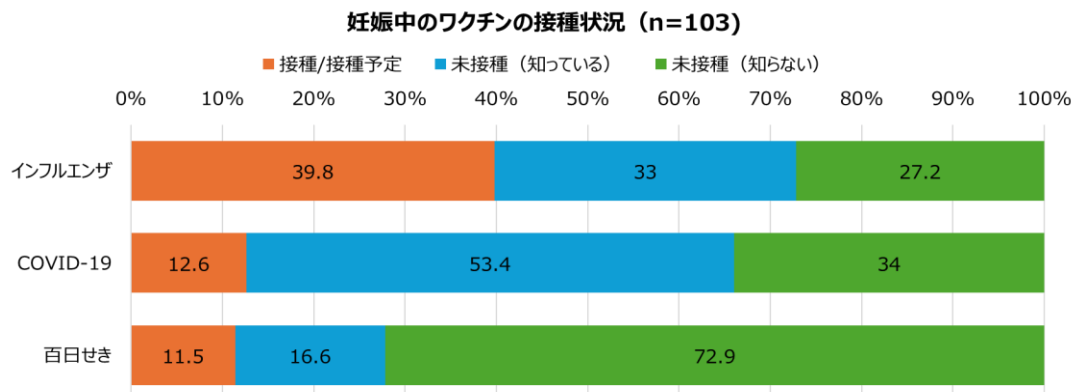
### 【調査概要】

- ◆調査日 2025 年 4 月 23 日～24 日
- ◆調査方法 インターネット調査（マクロミル）
- ◆対象 性別：女性 / 年齢：20 代～40 代 / 居住地：全国  
以下の①～④に該当する各 103 名、計 412 名
  - ① 妊娠中（子どもの有無は不問） ② 末子が生後 6 か月未満（妊娠中ではない）
  - ③ 末子が生後 6 か月～11 か月（妊娠中ではない） ④ 末子が 1 歳（妊娠中ではない）

◆**百日せきの認知度が低い**：インフルエンザや新型コロナウイルス感染症は、具体的な症状や乳幼児の重症化リスクについて、ほとんどの人が知っている。一方で、百日せきは、病気の詳細を知っている人は 6 割に満たない。妊娠中の 103 名では、病気の詳細を知っているのは 4 割まで下がる。



◆**妊娠中のワクチン、特に百日せきのワクチンの認知度が低い**：妊娠中のワクチンの接種は一般的ではなく、特に百日せきのワクチン\*を知っている妊婦は、4 人に 1 人。妊娠中のワクチンを知っている人では、インフルエンザで 5 割強、百日せきで約 4 割が接種している。妊娠中のワクチンを知らせることで接種につながり、結果的に本人や赤ちゃんを感染症から守ることが期待できる。



\*百日せきのワクチンは、三種混合ワクチン

## 流行時だけでなく、妊娠中の三種混合ワクチン接種を推奨

新生児、乳児の重症百日せき予防には、妊娠中のワクチン接種が必要です。現在のような流行期だけでなく、定期接種化に向けて、小児科学会と産婦人科学会などのアカデミアが三種混合ワクチンに対する推奨を表明し、さらに接種後の有効性、安全性を評価できるシステムを構築し、妊婦さんが安心して接種できる環境作りが求められます。